

Q9. ブランド・コンドームについて

	①ペネトン		②ミチコ・ロンドン		③GAP		④リーバイス		⑤その他/無回答	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)	人	(%)	人	(%)
全体(N=265)	110	41.5	18	6.8	40	15.1	19	7.2	78	29.4
男性(N=57)	21	36.8	4	7.0	7	12.3	5	8.8	20	35.1
女性(N=208)	89	42.8	14	6.7	33	15.9	14	6.7	58	27.9

Q10. コンドームを買う時、どう思う？

	①恥ずかしい		②何とも思わない		③その他/無回答	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)
全体(N=265)	110	41.5	137	51.7	18	6.8
男性(N=57)	16	28.1	40	70.2	1	1.8
女性(N=208)	94	45.2	97	46.6	17	8.2

Q11. コンドームはあなたが買いますか？

	①本人		②相手		③二人で		④その他/無回答	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)	人	(%)
全体(N=265)	83	31.3	106	40.0	60	22.6	20	7.5
男性(N=57)	47	82.5	3	5.3	6	10.5	1	1.8
女性(N=208)	36	17.3	103	49.5	54	26.0	19	9.1

Q12. コンドームは男性が買うものだと思いますか？

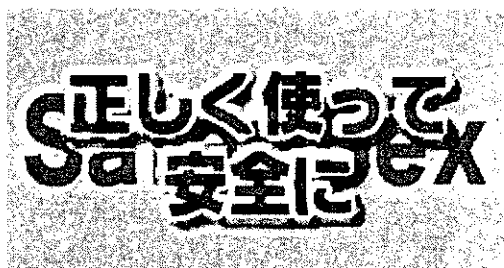
	①はい		②いいえ		③その他/無回答	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)
全体(N=265)	105	39.6	133	50.2	27	10.2
男性(N=57)	33	57.9	21	36.8	3	5.3
女性(N=208)	72	34.6	112	53.8	24	11.5

Q13. 女性が買いやすいパッケージ・デザイン・コンドームがあっただらいいと思いますか？

	①はい		②いいえ		③その他/無回答	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)
全体(N=265)	231	87.2	19	7.2	15	5.7
男性(N=57)	52	91.2	2	3.5	3	5.3
女性(N=208)	179	86.1	17	8.2	12	5.8

コンドーム 男性用♂

予定外の妊娠はもちろん、エイズをはじめとした様々な性感染症を予防するためには、コンドームの正しい使用方法を知っておくことがとても重要です。せっかく使用しても正しく使わなければ機能しない可能性もあります。最低限必要な知識とすることができます。実は誤解されていること・あまり知られていないコンドームの正しい扱いと使用方法をここで紹介していきたいと思います。



1	2	3	4	5
包皮をむく	毛を調える	取り出す	正しい手順	装着完了！

● 女性用コンドームに関連した情報はコチラをクリック

コンドーム指導: 岩室 紳也 先生

[もどる](#)

[更新情報](#)

[ホーム](#)

[サイトマップ](#)

[すすむ](#)

— Copyright by Japanese Foundation for Sexual Health Medicine —

● (財)性の健康医学財団

✕ 厚生科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

装着の準備1. 包皮をむく



先生の声

勃起したらすぐ装着！
まずはしっかり皮をむきます。

実際に性交が始まるまで装着しないという方が多いようです。しかし実際には勃起した時点から体液の分泌は始まっています。つまり、この時点でも妊娠も可能ですし、エイズをはじめとしたウィルスが体外にでて感染しうる状態になるということです。ですから、ペニスが勃起した状態になったらすぐにコンドームをつける習慣が大切です。そのまえに、いきなり装着するのではなく皮をむきます。これは、セックスの最中にはずれてしまわないようにするためです。

戻る

次へ

[もどる](#)

[更新情報](#)

[ホーム](#)

[サイトマップ](#)

[すすむ](#)

— Copyright by Japanese Foundation for Sexual Health Medicine —

① (財)性の健康医学財団

× 厚生科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

装着の準備2. 毛を調える



先生の声

巻き込まないように
毛をしっかり調えます。

次に装着したときに毛を巻き込んでしまわないように毛をしっかり調べておくことが大切です。装着時に毛を巻き込んでしまうと、セックスの最中にコンドームを傷つけ、破いたり穴をあけたりしてしまう 場合があるからです。

戻る

次へ

もどる

更新情報

ホーム

サイトマップ

すすむ

— Copyright by Japanese Foundation for Sexual Health Medicine —

● (財)性の健康医学財団

× 厚生科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

装着の準備3. コンドームを取り出す



先生の声

コンドームは本体を傷つけない
ように開封し、取り出します。

コンドームを実際に袋から出すときには、開ける前に指で中のコンドームを端に押しやってから開封します。切り口は完全に切り取ります。これは本体を中から取り出す時に傷つけることを防ぐためです。取り出すときはリング状になったヘリを指でつまみます。(あらかじめ爪を切り、角をとっておくことも大切です)指で触っただけで裏・表がわかるようにしておく、暗いなかでもスムーズに装着することができます。(巻いてある方向を指で感じることでわかります)

戻る

次へ

もどる

更新情報

ホーム

サイトマップ

すすむ

— Copyright by Japanese Foundation for Sexual Health Medicine —

① (財)性の健康医学財団

× 厚生科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

装着の方法4. 正しい手順



はじめに精液溜まりをつまんで
空気が入らないようにします。

爪を立てずに突起状に出ている精液だまりをつまみ、空気がはいらないようにペニスに付け、毛を巻き込まないように途中まで下ろします。この時点でいったんかぶせた部分を亀頭方向に寄せ、根元の皮膚のたるみが張るように伸ばしてから皮膚と密着するように根元まで下ろします。

戻る

次へ

[もどる](#)

[更新情報](#)

[ホーム](#)

[サイトマップ](#)

[すすむ](#)

— Copyright by Japanese Foundation for Sexual Health Medicine —

① (財)性の健康医学財団

厚生科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

装着完了5. 正しい状態



先生の声

このように取れたり傷ついたり
しにくい状態になれば装着完了。

上下に擦れたりしても、毛によって傷がついたり根元から徐々に抜けていったりしないような状態になれば 装着完了です。射精し、取り外すときは根元からはずし、精液がこぼれないようにしっかりと口を閉じて捨てるようにしましょう。

戻る

トップへ

[もどる](#)

[更新情報](#)

[ホーム](#)

[サイトマップ](#)

[すすむ](#)

— Copyright by Japanese Foundation for Sexual Health Medicine —

● (財)性の健康医学財団

× 厚生科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

身近に広がる性感染症／エイズ

若い人達の“性の健康”を守るために

いま、無症候性の
性感染症が大流行しつつあります

厚生省保健医療局
結核感染症課

厚生省保健医療局
エイズ疾病対策課

監修



財団法人 性の健康医学財団



RESU (スウェーデン性教育協会) のクリスマスカードより

も く じ

●はじめに	2
●“性”の“光と影”	3
“身体の性”の傷 とは	3
その“性の影”は本当に大変な問題ですよ	4
●“症状のある性病時代”から“症状のない性感染症”時代へ	5
新しい症状のない性感染症の大流行時代となる	5
今でも昔の性病が横行していると思ったら大変！	6
●若い人達に性の自由化が進んでいる	7
●性感染症に対する偏見をなくそう	9
●性器クラミジア感染症とはどんな病気？	10
ほとんどの場合、症状が出ない	10
確実に増え、特に若い女性に多い	11
●性感染症としてのエイズ	13
他の感染症はエイズにかかり易くする	15
●その他の性感染症	16
淋菌感染症	16
梅毒	17
性器ヘルペス	17
尖形コンジローム(ヒト乳頭腫ウイルス感染)	17
トリコモナス	18
毛じらみ	18
●“性の影”の予防	19
正しいコンドームの使用	19
ピルの正しい使用法	20
ピルもコンドームも —コンドーム使用は“本当の愛のあかし”	21
ピル処方時、自分の為にクラミジアの検査を	22
●憂うべき日本の性感染症大流行の現状を考えよう	24

はじめに

何事にも“光と影”があるように、性(セックス)にも光と影があります。

若い人々にとって、男と女のふれあいは、ロマンチックな光り輝いているものでしょう。しかし、そこには、よほど注意していないと、“望まない妊娠”とか“恐ろしい性感染症”の影がひそかに近づいて来て、皆さんの大切な性の健康をおびやかすことになるのです。

ことに近頃の性感染症は、注目されているエイズを始め、感染していてもはっきりした症状がないので、お互いに自分が感染しているのに気付かずに、無自覚のまま、相手にうつしてしまうことが少なくないのです。

しかも感染しているのを知らないまま、治療せずに放置していると、徐々に身体が蝕ばまれ、取返しのつかない“深刻な性の健康障害”に陥ってしまうのです。まさに“性のあるところ感染あり”と言われる程、今や普通の日常の性活動の中に、そのような性感染症が入り込んで来ています。よく言われるような、“遊んでいる人達のかかる感染症”ではなくなっており、性活動を持っている人なら誰がかかっても不思議ではない程流行しているのです。

例えば、今一番ひろがっている性器クラミジア感染症などは、一般の女性でも、15～19歳で4.3%(23人に1人)、20～24歳で6.4%(16人に1人)が、殆ど無自覚のうちに感染しているとされています。そして全国で感染者が95万6千人にもなると推定されている程です。

“自分はそんな不潔な感染症は関係ない”などと安心してはいられないのが現状なのです。性感染症は一部の人のものというのは、もはや“偏見”と言わざるを得ない程にひろがっており、ひそかに若い人々の男と女の幸せな出会いを傷つけ始めているのです。

そのような性感染症を、無自覚のうちにうつし合わない為には、予防のため恥ずかしがらずに、堂々と“正しいコンドーム使用の話合い”をして、お互いの性の健康を守る習慣を身につけるようにしなければ、取返しのつかないことになります。

“コンドームを使うことは、今やエチケット”であり、また、新しい時代の若い人々のルールでもある訳です。

愛や信頼だけでは無症状の性感染症から身を守ることはまったく出来ないことを、お互いに理解するために、是非このパンフレットをよく読んで戴きたいと、心から願っております。

自分の、また、パートナーの性の健康を守る新しいルールにより、若い人々の男と女の出会いが傷つかず、幸せなものになることを期待して止みません。

“性”の“光と影”

“性”は人にとって一番大事な文化であります。確かに我々は生き物として、男女の性別を持ち、肉体的・本能的生活を送っています。しかし、また同時に、男として女としての社会的暮らしや交流のなかで、男と女の素晴らしい人間の文化をはぐくんでいるのです。また、それを楽しみながら、毎日を送っているのです。

ところが、その“性”にも、やはり“光と影”があります。医学的にもまた、社会的にも、いろいろ問題が生まれていることは、説明するまでもないことでしょう。ではその“影”の問題のなかで、身近で一番深刻なものはなんでしょうか？ やはり性の最も基礎である、自分の“性の健康”が、傷つき損なわれることではないでしょうか？

それが崩れれば、生活のすべてが崩れていくような感じになるからです。それは、単に健康問題だけでなく、かなり“深い精神的な悩み”にもなり、他の健康問題以上に、自分ではあまり気にしないようにしていても、なかなか癒し得ない、“心の傷”となりがちなのです。それは、性が生活の基盤である文化であるからではないでしょうか？

やはり、まず自らの“身体の性”を大事にすることが、また“心の性”をも大事にすることになるのです。このことは、特に“身体の性”を自覚し、経験し始める、10歳代から20歳代前半にかけての、若い人達にとって極めて大事なことです。そのことをよく理解し、また考え、自覚しておかなければ、取りかえしのつかないことになるのです。長い人生の初めに受けた“心の性”の傷は、なかなか癒し難いものであることを忘れないでください。



性の光

パートナーとのいい関係
結婚、妊娠、出産

性の影

性感染症
望まない妊娠

“身体の性”の傷 とは

性を経験するといっても、深刻な問題は、やはり直接身体を触れ合う、性交渉を持つことによっておきてきます。

生物学的に言えば、性交渉は子供を創るためのものですが、性の文化がすすむなかで、私達人間は、性行為と生殖とを分けるようになり、性行為それ自体を楽しむことを行うようになってきました。その為、“喜ぶべき性の光”である“妊娠”も、時には“望まざる性の影”になることもあります。

また、その人間の最も密接な体の触れあいである性行為は、性器局所や血液の感染症を、簡単にセックスパートナーにうつすという、大きな問題を抱え

ています。そのため“性のあるところ感染あり”と言われているのです。

ですから、若い人達が慣れない性体験をするとき、しっかりその“性の影”である“望まない妊娠”と“恐ろしい性感染症”の存在を知っておき、細心の注意をはらわなければなりません。そして正しい予防処置を覚えておいて、それを必ず実行しなければならぬわけです。“愛”とか“信頼”では、そのような“性の影”の予防は全く出来ないのです。“大丈夫だろう”などという安易な気持ちでいることで、身に降りかかってくる火の粉によるヤケドは、かなり辛いものになります。

その“性の影”は本当に大変な問題ですよ

このように説明しても、おそらく多くの若い人達は、そんなことは自分には関係無いと思っているかもしれません。しかし実際は、かなり関係深いのであって、自分だけは大丈夫などと思っているのは、本当のことを知らないからだけのことです。たとえ、今まで関係なかった人でも、これから関係あるようになる人もかなり大勢いる筈です。ですから、これから説明することを、是非丁寧に読んで覚えておいてください。必ず役に立つと信じます。

ところで“望まない妊娠”と“恐ろしい性感染症”、この二つの“身体の性の影”は、今や日本の若い人達の上へのしかかってきているのです。その“影”が広がるのを心配させるような、社会的・医学的背景があるのです。かなり大きな問題となって、皆さんの身に迫っているのです。

何故そうやって来ているのでしょうか？ それには次に説明するような、是非知っておいていただきたい、幾つかの背景と状況があるのです。その理由をご覧になると、皆さんも頷けるとおもいます。

① 性の自由化

若い人たちの間に、仲良くなれば、性関係を持つようになるのは、別にさして不思議なことではないという、いわゆる“性の開放”が急速に進んで来ています。性交渉をもつことに、あまり心理的な抵抗をもたなくなってきたのです。

② 性教育の不徹底

それにも拘わらず、残念ながら正確な、しかも具体的な避妊法や性感染症予防法に関する性教育が十分行われていません。その結果、若い人の間で、そのような問題がひきおこす、身の危険に対する危機感がなく、性交渉の時、その予防が正しく十分に行われていないのです。その為、望まない妊娠や性感染症感染例が、若い人の間に急増しているのです。

③ 症状の無い性感染症に流行

今までの、古い型の性病である淋病や梅毒などは、症状がすぐでるし、また抗生物質で治り易いので、

罹っていればすぐ分かるし、罹っても治療しさえすればよく、さして心配することもないと思込んでいる人が少なくありません。しかし、現在流行している新しい幾つかの性感染症は、殆ど症状が出ないのです。罹っても、自分ではそれと自覚出来ず、また抗生物質の効かないウイルス性の感染症が流行しているのです。感染していても気づかず、また、自覚しないまま、パートナーにもうつしているのです。

④ エイズに対する誤った認識

そのウイルス性の性感染症で、最も注目されているエイズについても、同じことが言えるのです。昔の話である薬害エイズにばかり注目が集まりすぎていて、今流行しつつある、一番問題の“性感染症としてのエイズ”への危機感が殆ど知られていないのです。その為、前の項で説明したような、性感染症全体に対する甘い認識とも重なって、性感染症を若い人達はほとんど怖がらなくなっているのです。“エイズが性感染症として広がりつつある”ことをよく理解していれば、もう少し性感染症を警戒するようになるはずなのですが……。

⑤ ピルが解禁になった

女性待望のピルが解禁になり、性の自由化がさらに進み、コンドーム使用率が低下する可能性が高くなって来ることも考えられます。すると性感染症予防がさらに不完全になるので、性感染症やエイズの流行が増大するのではと、かなり心配されています。

このように①から⑤までに説明した事で、思い当たる事がかなり多いのではないのでしょうか。そこで、これらの問題点について、より理解を深めてもらう為に、もう少し詳しく“恐ろしい性感染症”について説明しておきたいと思つています。若い人々にとって大切で、また大変役に立つ話であると思つていますので、是非ゆっくり最後まで読んで下さい。

“症状のある性病時代”から“症状のない性感染症”時代へ

“性の影”である“望まない妊娠”と“恐ろしい性感染症”。この二つのうち、どちらがより深刻かと言う話題をよく耳にしますが、そのどちらも同じぐらい大変な問題なのです。

ただ、今やピルが解禁になって、妊娠のほうは取りあえず避けることが可能になってきました。今や“性感染症に罹る”方が、より現実には注意しなければならぬ問題点となって来ています。そこで、ここでは、性感染症問題に焦点を合わせて説明をしたいと思います。

かつて“性病”とっていた性感染症は、歓楽街、今日でいう“フーズク”などで遊んだ男性達が感染した、自業自得の“不道德な”不潔な感染症とみなされてきました。そしてそんな遊びをした男性から病気をうつされる女性は、まことに気の毒な人であると、同情されてもいました。その為、歓楽街の女性達とそこで遊ぶ男性達を啓発教育し、病気を広げないようにしさえすれば、その忌まわしい感染は、それほど広がらないはずである、というのが当時の人達の考え方でした。

ところが、今や世の中が大きく変わり、性病は今までのような“特別な人々が罹る感染症”ではなくなってきて、普通の性生活をもつ人々が、かなり罹っている病気にまでなって来たのです。その状況に対するため、1999年（平成11年）4月から施行された“感染症予防新法”では、“性病”は“性感染症”と呼び名を変え、しかも他の感染症、例えばインフルエンザとか

結核とか、また、エイズなどと肩をならべた感染症として扱われるようになりました。性感染症は特別な人達のみが罹る、別扱いするような病気ではなく、今や性生活をもつ人なら、誰が罹っても決して不思議ではない感染症、となってしまうのです。言うならば、性生活の“生活環境汚染”のようになっており、性生活をもつ人々の“生活習慣病”とさえ考えられるようになってきました。まずその認識を持てば、性感染症問題が自分の身近に迫って来ていることが理解いただけるとと思います。誰でも罹る可能性があるもので、たいしたことではないのだと考えてはいけません。困った、恐ろしい感染症であることをよく理解してください。

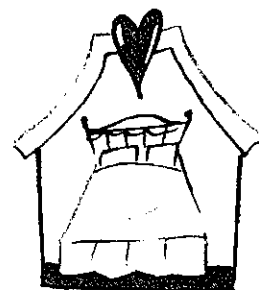
歓楽街・フーズク街



昔の性病

梅毒、淋病、軟性下疳、性病性リンパ肉芽腫

日常の性生活 家庭・恋人同士



今の性感染症

クラミジア、ヘルペス、尖形コンジローム、HIV・AIDS、B型肝炎

新しい症状のない性感染症の大流行時代となる

“世の中が変わった！”とよく言われますが、何が変わったのでしょうか？

性病時代に流行していた梅毒や淋疾、軟性下疳、また性病性リンパ肉芽腫など（これらの病気がどんなものか、あとで説明します）は、感染したことが自

分でわかるような症状や病変が、性器やその周囲に出て来ます。そのため、感染した人は比較的早く感染に気づき、治療を受けていました。したがって、“感染の輪”はそれ程大きく広がりませんでした。歓楽街に遊びに行かない普通の人達が、自分には関係ない

病気と考えていても、さして不都合はなかったわけです。

ところが、最近はそのように症状の出る“性病”が、症状の出にくい、しかも治りにくい“性感染症”にさま変わりしてきているのです。

それは医学の進歩により、ペニシリンを始めとする強力な抗生物質が創り出され、治療が比較的容易になってきたため、症状が出やすかった古い型の性病群は次第に影をひそめるようになり、それらに代わって、症状のあまり出ない性器クラミジア感染症や性器ヘルペス、尖形コンジローム、B型肝炎、HIV感染／エイズなど、ウイルスによる新しい性感染症群が台頭してきた結果によるものなのです。そしてそれらは、性生活をもつ一般市民の人々の中に、ひ

そかに大きく広がり始めてきてしまっているのです。今や、症状の殆ど出ない性感染症群が、知らないうちに大流行してしまっている時代になっているのです。しかも、クラミジア感染症以外のウイルスによる性感染症は、治療が大変難しいのです。

さらに、最も恐れられている“エイズ”が、そのような症状のない性感染症群の中にしっかりと仲間入りして、世界中に広がり流行し、すでに感染者が全世界で4000万人に達しています。そして、世界で毎日1万6千人の新しい感染者が出ているとされ、その90数%は性感染症として蔓延しているのです。そのため、この“新しい性感染症時代”の到来が社会的に大問題になってきているわけです。これは日本でも同じことです。

今でも昔の性病が横行していると思ったら大変！

そのように新しい性感染症が流行して来ている一つの大きな理由は、抗生物質で古い型の性病が容易に治療出来るようになったことから、多くの人々は、今まで恐れていた性病に対する危機感を、すっかりなくしてしまったことによるのです。性病に対する恐怖感がなくなり、また、たとえ感染しても心配ないという安心感が広がってしまったのです。一時は、歓楽街へ遊びに行く時などでも、ペニシリン薬を事前に飲んでさえいれば安心であり、“性病恐るるに足らず”というムードが、人々の間にかなり流れてしまった程でした。

ところが、そういう人々の“危機感喪失”という心の隙をつくように、ペニシリンが効かない“クラミジア”やウイルス性の性感染症である“性器ヘルペス”、“尖形コンジローム”、“B型肝炎”、そして“エイズ”などの新しい性感染症がひそかに大きく広がり始めてきたのです。これらの新しい性感染症群は、淋病・梅毒時代と大きくさま変わりして、感染しても殆ど症状がなく、自分では感染の自覚が出来ない“症状の出ない性感染症時代”に突入してしまったのです。

そのような現状にも拘わらず、多くの人達は、性感染症に罹るとしたことなどあまり心配せず、予防のための正しいコンドーム使用に、十分な配慮をしていないのが現状なのです。しかし、それは性感染

症流行の実態を正しく知らないから、そんな呑気なことを言ったり、したりしていられるのではないのでしょうか。その上、罹ったとしても、今までの性病のように、すぐ治療すれば癒すことが出来ると思いきこんでいるのです。ところが、何度も説明したように、無症候の性感染症は、発見されることが少ないばかりでなく、クラミジア感染症はともかく、他の多くのウイルスによる感染は、現在は、まだよい治療薬がないものが殆どなのです。

ことに、今世界的に注目され最も恐れられているエイズが、あきらかな無症候の性感染症として、日本でもかなり広がりつつあることを知らない人が多いのです。是非、正しい現状認識をして欲しいものです。



昔からのバクテリア(細菌)による性病群

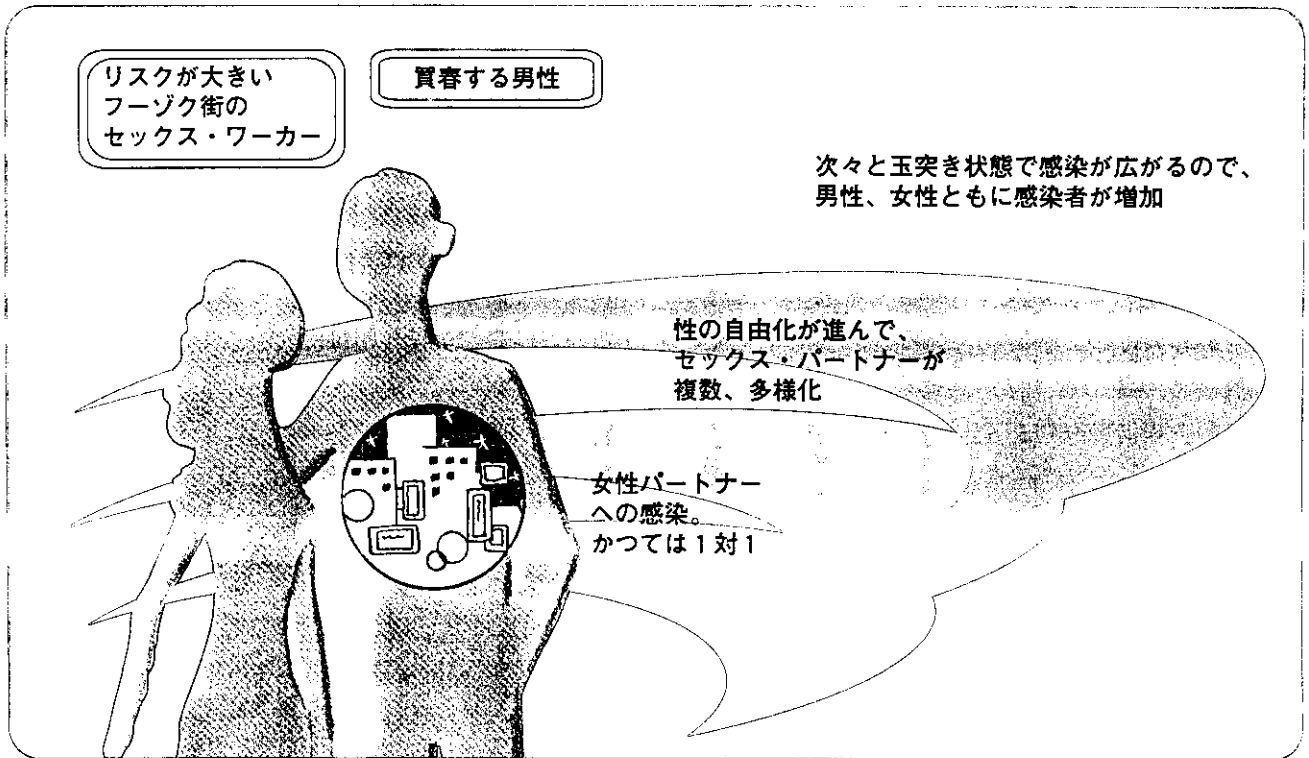
淋病、梅毒、軟性下疳
性病性リンパ肉芽腫



新しい時代のウイルスによる性感染症群

性器クラミジア、性器ヘルペス、
尖形コンジローム、
HIV感染／エイズ、B型肝炎

若い人達に性の自由化が進んでいる



ただ、そのような症状のない性感染症が出現したからといっても、“症状に気付にくい”ということだけで、今のような大流行をみるようになったわけではありません。

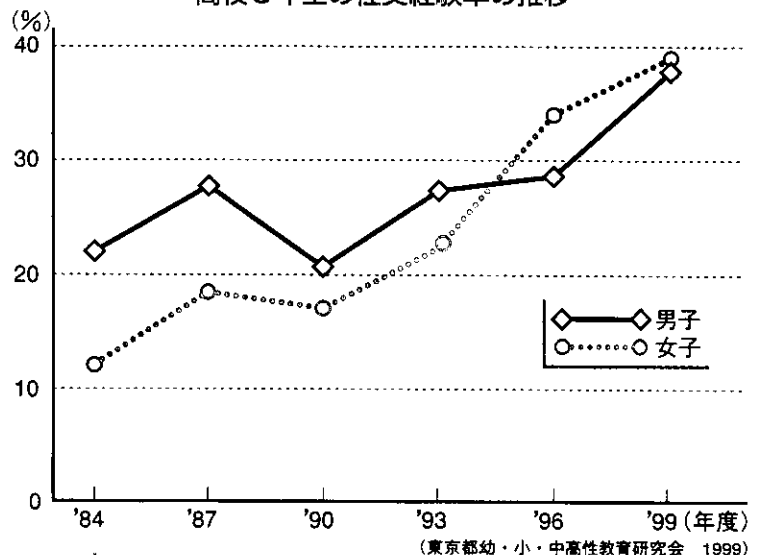
それにはもう一つ、世の中の“性”に関する考えが、昔の性病時代とは大きく変わってしまっていることも大きな原因なのです。いわゆる“性の自由化・解放”が進んだことで、一般の人々の中にも、多様な性関係がみられるようになってきています。それが無症候の性感染症の流行を大きく広げる理由になっているのです。

確かに初めは、そのような無症候の性感染症も歓楽街・フーズク街から広がり始めたのかも知れません。しかし感染した男性は、そのことに気付かず、治療もしないまま親しい女性のパートナーに感染させてしまうのです。昔の性病時代であれば、大体は、その女性パートナー1人の段階で感染のひろがり止まっていたはずですが。したがって、そこから更

に、次々と他人にうつっていくということはあまり見られませんでした。

ところが昔と違って、今や“性の自由化”が進んできたことから、その感染した無症候の女性が、自分だけで止めておくのではなく、さらに別の男友達へもうつす機会をもつことも多くなっているのです。

高校3年生の性交経験率の推移



＜最近急上昇しています＞

そしてさらに、うつされたその男性が、また次の女性パートナーにうつすという、玉突き現象が起こり、感染伝播の形で、感染の輪がどんどん大きく広がってきているのです。このような状況があらわれる程、性解放が進んだ世の中になってしまっているのです。

最近の性的な男女関係の多様化を示すものとして、例えば、高校3年生の性経験が4割前後、大学4年生では7~8割にも達していることが、各地の性教育研究会の調査で明らかにされております。しかも性交渉時、性感染予防のための正しいコンドーム予防を行っている割合は、かなり低いとされております。また一般の人々の、感染リスクの高いフーズク街での性交渉時でさえも、コンドーム使用率は2割程度という調査報告もあります。

そのような社会状況のなかで、知らないうちに無症候の性感染症に自分が感染してしまっている可能性はないと、あなたは言い切れるのでしょうか。

ここにフランスの面白い、きわめて示唆に富んだ写真のポスターがあります。それは、昨夜ベッドを共にした男女がいるとして、その性的な人間関係の背景を考えると、下図のような複雑な、また膨大な男女関係につながっていることが示されているので

す。この中の男女のどこかに、無症候のエイズを含めた性感染症をもった人がいたとすれば、その性感染症が、次々と玉突き状に伝わってきて、昨夜の男女の2人の所までくる可能性が全く否定できないといえましょう。まさに“性のあるところ、感染あり”ということになるわけです。このような状況にまで、性の自由化が日本では進んでいないとしても、これに近づきつつあることは事実でしょう。

密接な粘膜と粘膜の接触のもとで、次から次へと感染症は伝わり、広がっていくものであることを忘れて欲しいと思います。それなりの危機感と予防警戒の意識を身につけて、自らの性の健康を守るべきではないでしょうか。

今や、無症候の性感染症が、広く日常的な、普通の性生活を持つ一般市民の間にも、自覚のないまま浸透してしまっているのです。しかも症状がないため、感染した人々が治療せずに放置することにより、次々に感染者の数が積み重なり、増え続けているのです。

まさに“性あるところ、感染あり”といっても言い過ぎではない程になっているのです。ことに性的に活発な生活をしている若い人々の中には、かなり

①昨夜、サラとミゲルはベッドを共にしました。それは何を意味しますか。

②サラとミゲルは、過去1年間に、それぞれ3人の異性と性交渉がありました。

③それぞれの若者が、過去1年間で、3人の性交相手がありました。

④過去4年間で、性関係をもった若者の数は、80人になります。

⑤過去7年間で、性関係のあった若者の数は1460人、12年の間でその数は何と、531,441人にもなります。この中に無症状のエイズや性感染症にかかっている人がいたら、昨夜の2人にその病気がつながって、どちらかが感染してしまった可能性があります。

(COLORS n.7の記事をもとに作成)

“症状の出ない性感染症”が深く浸透してしまっていることを知ってもらいたいものです。

自分はフーズク街とは関係がない、と言っても、私は性感染症に罹るような危険で不潔な関係をして

いないと思っても、自由な友人間での性交渉もっている以上、知らず知らずのうちに、そのような、新しい症状の出ない性感染症に罹ってしまっている可能性は十分にあるはずです。

性感染症に対する偏見をなくそう

かつて“性病”と言われていた時代は、感染した人には何となく“不道德”とか“不潔”とかというイメージがつきまとい、殆どの人が感染することは恥ずかしく、不名誉なこと、と考えていました。そして、“自分はそんな不道德なことにはしない”ので、性病には全く関係ないと、胸をはるのが、立派なこと、品行方正のあかしのように受けとられていました。

しかし、前述のように、現在流行している“症状の出ない性感染症”を、不道德な不名誉な感染と考えるのは、すでに“偏見？”に近い程、性生活をもつ一般の人々の間に広がってきているのです。それ程若い人々を中心に、現在の男女の日常的な多様な性的関係の中に、知らず知らずの間に症状の出ない性感染症がひそかに入り込んできてしまっているのです。

ですから性交渉の時、いつも正しくコンドームを使用していない限り、感染の危険の高いフーズク街での遊びの性関係でなくても、普通の、どのようなパートナーとの間でも、無症候の性感染症をうつされないという保証はなくなってしまうのです。

このように一般の人々の性生活の中に、症状の出ない性感染症がひそかに大きく広がってきており、

今や性生活を持つ人々にとって、性感染症は“国民病”とか“性生活の生活環境汚染”さらには“性生活の生活習慣病”と言える程までにもなっています。

もはや性感染症は、特別な危険なフーズク街で遊

んだ人々の罹る

感染症ではな

く、性生活をも

つ程の人なら、

すべての

人が感染の

可能性をもっ

ているとって過言

ではありません。したが

って、今までのように、性

病や性感染症に対する不道德

とか不潔とかいう“偏見”を是非

なくしてもらいたいのです。自分は性感染症には関係ないと信じていても、性生活をもっているなら、性感染症の問題に無関心ではいられない筈です。不潔なことという偏見をなくして、もしかしたら自分もかかっているかも知れない、と考えるようにならないと、性感染症の大流行を抑え込めない程の状態にまで至っていることを理解していただきたいと思

います。そこで心配なのは、若い人達が“そんなに皆が罹るのなら、偏見は持たないけれど、逆にあまり特別なことと思って気にすることもないのでは……”と考えてしまうことです。そこが“大きな落とし穴”なのです。これから説明するように、医学的に大変な問題が、身体の内々に徐々に行進しているのですから、それを十分理解して、自らの性の健康を守るために、検査したり、予防に努めることをよく知ってもらいたいのです。

STDなんて私には関係ないわ!



性生活のある人なら誰にでも可能性はあるよ!

性器クラミジア感染症とはどんな病気？

さて、ひと口に性感染症の流行といっても、クラミジアからHIV感染／エイズまでの感染症それぞれが、いろいろな程度にひろがっており、驚くような、様々な身体をそこねる“影”の問題をおこしていま

す。それを全部ここで説明する余裕がないので、まず、性感染症の中で、最も流行していて、しかも多くの問題をかかえている“性器クラミジア感染症”について、少し考えてみましょう。

ほとんどの場合、症状が出ない

クラミジア（正しくはクラミジア・トラコマーティス）は、昔“眼のトラコーマ”として大流行していたのですが、最近は日常生活の衛生状態が改善したため、すっかり影をひそめてしまいました。しかし、その代わりに、今や、“性器のトラコーマ”となってひそかに大流行しているのです。

昔
目のトラコーマとしてはやっていた



今
性器のトラコーマとして大流行



クラミジア・トラコマーティス感染症

〔女性の性器クラミジア感染症〕は、きわめて症状が軽く、感染症例の5人に1人しか症状が出ません。たとえ症状が出ても、わずかに帯下（おりもの）があったり、不正子宮出血や下腹部痛が出る程度で、医師でも気を付けないと見落とすような、感染をそれと自覚出来ないことが殆どなのです。また膣・子宮のみでなく、尿道にも感染がひろがり、膀胱炎症状を出すことも時々あります。検査して細菌が見つからないから、膀胱ノイローゼだとして、鎮痛剤を飲まされることもあるので、注意してください。

とにかく、このように症状が少なく軽いため、よく“性器の風邪ひき”などといって軽く見て感染をさして問題視しない医師さえいる程です。しかし、本当に治療しないで長く放置していてよいのでしょうか？ 実はかなり深刻な問題をおこしてくるのです。

放置されている間に、関係した男性パートナーへの感染源となるのは当然のことですが、感染は本人の気づかないうちに子宮頸管内を通過して卵管に入り、さらに骨盤内に大きくひろがって、“骨盤内感染症”をおこします。そのために卵管がつまり、卵の通りが悪くなり、かなりの人が、数年のうちに、治り難い卵管の通過障害による不妊症となってしまいます。

また、たとえ妊娠しても“子宮外妊娠”となることもあります。また、感染がさらに腹腔を上行して肝臓の周囲に炎症をおこして、“右の上部脇腹に強い痛み”を覚え、救急病院へ駆け込む女性も時々みられます。

さらに、たとえ妊娠したとしても、流産・早産をおこすこともあり、ことに切迫流産のため、低体重児が生まれることが多いことが注目されています。

さらに幸い無事出産したとしても、母子感染をおこして、新生児が眼瞼結膜炎や中耳炎をおこしたり、また“重篤な新生児肺炎”になり、空セキがつづきミルクを飲まない元気のない赤ちゃんとなり、亡くなることもあります。そのような、母から子供への母子感染という、次世代にも影響を及ぼす大きな問題をかかえることにもなります。

また、母親本人が、出産後に産褥熱で悩まされることが少なくありません。

このように、クラミジア感染はあまり目立たない形でありながら、かなり女性の“性の健康”を犯す、大変重大な問題をかかえ込むような感染、と言って過言ではありません。それを重大視しないで良いのでしょうか？

〔男性の性器クラミジア感染症〕は、尿道に軽い炎症を起こし、排尿時に尿がわずかにしみたり、濃い

分泌物が少し出る程度のことが多いのです。しかも感染症の半分は、そのような症状さえも殆ど自覚しない程、軽い症状に止まっています。ただ、放置すると菌が消えないため、いつまでもパートナーへの感染源として菌をばらまくばかりか、自分の中でも尿道炎から、さらに体の中に入って“副睾丸炎”や“慢性前立腺炎”などをおこすようになります。

なお最近では、口唇を使ってのオーラル・セックスがかなり一般化していることから、性器のみでなく、口の中（口腔部）から、クラミジアが見つかること

も少なくありません。性器クラミジアに感染している女子の、4人に1人は、口の中からクラミジアが検出されたという報告もあります。そして性器接触をしないのに、“オーラル・セックスからだけで尿道炎”になった男性が、最近かなり医師を訪れるようになり、新しい感染パターンとして注目すべき社会現象になっています。

このオーラル・セックスによる感染は、淋病や梅毒はもちろんのこと、ヘルペス、さらにはエイズもおこるとされています。

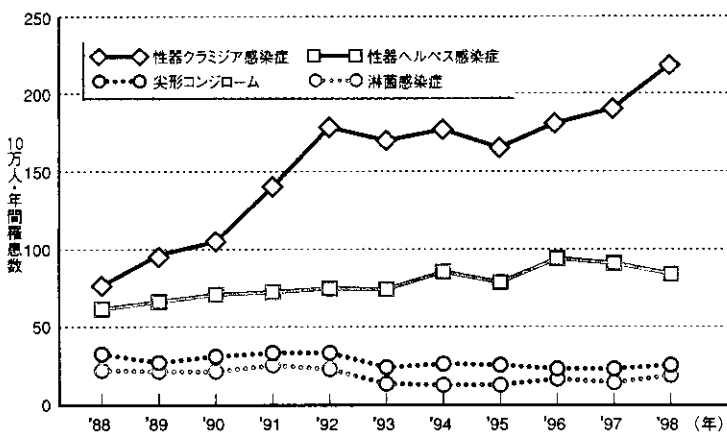
確実に増え、特に若い女性に多い

前項で説明したように、この性器クラミジア感染症は、女性で8割、男性で5割が、殆ど症状の出ない感染なので、実態がつかみ難いのです。しかしそれでも一部の感染例は、軽いながら症状を出すので、症状を訴えて医師を訪れ、治療を受けた症例数については、厚生省による性感染症疫学調査が行われて

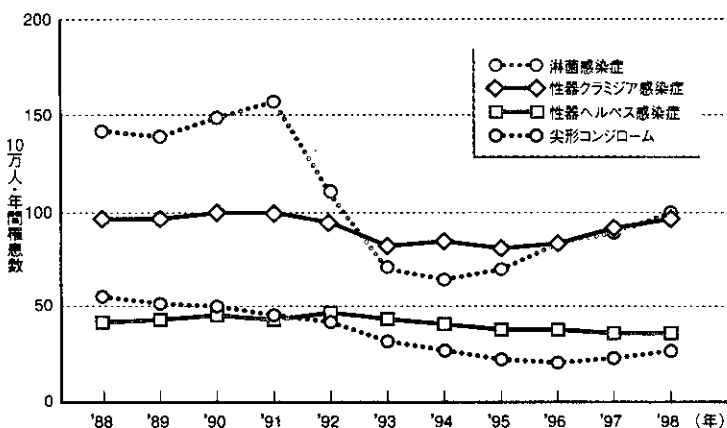
います。その、性器クラミジア感染症と診断された症例数の年次推移は左下の図に示す通りです。

1992年迄は、ペニシリン時代の“性病恐るに足らず”という危機感喪失の社会的ムードの中で、コンドーム使用などの感染予防が忘れられたため、この感染症は女性中心に、かなり急増していました。

本邦における女子10万人あたりの主なSTDの年間罹患数の推移



本邦における男子10万人あたりの主なSTDの年間罹患数の推移



ところが1992年に、エイズが性感染症として広がっていることがテレビ・新聞などで一時的にセンセーショナルに報道されました。その時期は、その報道に驚いて、多くの人が性感染症を心配し、その予防に留意し、積極的にコンドームを使用するようになりました。そのため、その当時は幸いにして、さしもの性器クラミジア感染症の急上昇傾向も、一時、強く抑えられたと思われ（ちなみに、男性の淋疾も同じように反応しました）。

ところが、その後、急に“薬害エイズ問題”が社会の注目を集め、人々のエイズに対する注意は、そちらに集中し、エイズは特別なことでおこる感染症であるという印象をもつようになり、無症状の性感染症として広がるエイズへの認識が極めて低くなり、それがコンドーム使用率減少の一つの要因になったと思われ。

そして、その人々の心の隙をつくように、1994年頃から左の図に示されるように、無防備の性交渉の間隙をぬって、再びクラミジア感染症が増え始め、今もどんどん増え続けて